

経営と健康

大河ドラマ葛屋重三郎 (上)

講談師 一龍斎貞花



重三郎の前に電機に係のある感震ブレイカー無料設置についてご紹介を。

東京都葛飾区(私の居住地)では、震度5強相当の地震で電気を止める感震ブレイカー無料設置します”の案内。

勿論他地区でもこうした推移はあると思うが、戸建木造住宅平屋又は2階建。店舗・会社・事務所・倉庫・工場等と住宅が合築されている場合、住宅部分の床面積が延べ面積の1/3以上が条件。また感震ブレイカー機能付き電盤設置などの費用助成。

地震が多発の現在、全国的にこうした行政の推進が行われることを願っています。

重三郎が生れた吉原の歴史

江戸初期岡場所などが江戸各所に点

在していた。そこで遊女屋の主人庄司仁右衛門が幕府の許可を得て葎や茅の生い茂っているところを開いたところから葎原。後に吉原と呼ばれるようになります。今の日本橋人形町あたり。

江戸でただ一カ所幕府公認の色街。

当初は江戸の外れだったのが人口の急増で江戸の中心になっていき、市中に悪所のあるのが幕府は面白くない。移転を考えているところへ明暦3年の大火によって、江戸の町はずれ浅草田圃へ移転。元吉原は太夫75人、格子女郎31人、端女郎881人、廓の数が125軒(あずま大全) 約千人の引越し、江戸の町中を移動の時治道にはこれを見ようと大勢の人が押し掛けたという。幕府からの移転費用一万五百両、元吉原2町4方の広さに対し3町の広さ。江戸市中にある風呂屋を取り

潰し、そこで働く湯女遊女を吉原へ譲渡。幕府公認とはいえ実に優遇。「ありんす」言葉は田舎から出て来た遊女の方言を統一。この廓町を奉行所の命により管理統制したのが揚屋「尾張屋」を営んでいた清十郎。新吉原に井戸がなかったため、最初に井戸を掘ったのが尾張屋清十郎。尾張知多の出身。紀伊

国屋文左衛門は尾張屋の常連客で、水に不自由していたのを掘ってくれた。すると名水が湧き出し吉原の人々はこの水を使い、紀文はこの時金銀をまき散らしたという(吉原大全)。やがて大名、大店の旦那衆が遊び一日千両のお金が落ちたという繁栄。

吉原で働いていた重三郎の実父も尾張の出身。重三郎が吉原で生れた吉原の紹介をしました。

吉原細見さいけん

来年の大河ドラマ葛屋重三郎。ご存知ない方もいらっしゃるのではないかと思います。

写楽や歌麿はじめヨーロッパにジャポニズムブームを起こしたのは重三郎のプロデュースからでした。

時代や作品の前後はお許し頂き、講釈師見てきたような貞花の創作講談。

江戸の名プロデューサー葛屋重三郎をお聴き下さい。

当時は世相や洒落本、面白く風刺した黄表紙が人気でした。

その先鞭をつけたのが地本問屋鱗形屋お抱えの朋誠堂喜三三、恋川春町でした。その頃本を買うのは裕福な人で貸本屋から本を借りて読むのが一般的

でした。幕末の本のレンタル料は一冊6文から30文。かけそば一杯16文ですからさほどではありませんが、買うとなると高額でした。

貸本の人気は軍記物やのちに出版される南総里見八犬伝や水滸伝。

今のTSUTAYAは、同じレンタルだからと重三郎の蔦屋から取ったのかもしれないが、のれん代払ってるんですかね。ただ創業者の祖父が営んでいた芸者の置屋の屋号が蔦屋だったので、そこから付けられたというんですが、重三郎の蔦屋の意識があつたのではないのでしょうか。

重三郎は、274年前の寛延3年(1750)1月7日、吉原で仕事をしていた重助夫婦の子として生れ、7歳の時両親が離婚したため引手茶屋蔦屋の養子となります。花魁から「重ちゃん」なんて可愛がられていたんですよ。

24歳の時、吉原大門前に書店耕書堂を開き吉原細見を出版。

一手販売だった鱗形屋の手代が、大坂の出版物をタイトルだけ変えて出版したことから、鱗形屋は訴えられ主人孫兵衛が監督責任から罰金20貫文。類似したものの出版は禁じられていた。

こうして吉原トップの鱗形屋は大きなダメージを受けます。

「おい、有名な三浦屋の高尾太夫、今の花魁は七代目だってよ。見世はここにあるんだ。幾ら？ こりゃ手が出ねえや」

「おれが行く店はここか。こりゃ分りやすいや。今度はこの店の遊女親切だと書いてあるから指名しよう」

なんて、なにしろ遊女の指名を受けたり、遊女屋へ案内する引手茶屋の養子で、吉原の地図から遊女、芸者一覽表で序文を平賀源内に書かせるなど至れり尽くせり。生れ育った吉原ですから、現在と同じ風俗ガイドブックは実にくわしく、遊ぶ人の必須本となり重三郎の吉原細見はたちまち大評判。

「よし今度は、見世や遊女・花魁をグレードアップする。一般には売らない本を出そう」

吉原は桜をはじめ季節の花を植え華やかにした。桜をはじめあやめに百合や水仙、桔梗などその花の処へ店とお抱えの花魁の名前を書き、一流の妓楼のみで見世や花魁が上客だけにプレゼントする特別な贈答品。

「うちの花魁が載っていますよ」

「わちが載っておりますえ」と、この本に載るのがステータス。これを買えるのはなじみの客だけだから貰った客は鼻高々。

「なんでえ、おれたちには売ってくれねえのか、欲しいなあー」

庶民は羨ましくて仕方がない。そんな声が大きくなり、

「そんなら切り売りしよう」

花を一つ一つ切り取り一般向けに販売。庶民は大喜びであこがれの遊女のカードを買う。店も花魁も売上げがステータスとどんどん買う。

そのうちに全部揃えようと、

「おい、牡丹が中出ねえぞ」

買い占めて特別なカードにするのと同じ。どんどん買ってやつと揃える。カード交換会があつたとか。なかったとか。

「全部揃えよう」てんでうまいこと考えたもので、こうして利益を得るや、

「吉原だけじゃいけねえ、もっと大きな商いをしたい。そうだそれには花のお江戸の中心地日本橋に進出することだ。参勤交代のお侍や旅人のお土産の人氣が絵草子、浮世絵、江戸名所図会、道中するのに軽いという利点もある」と、日本橋通油町、現在の大伝馬町、老舗の^だ大店もありました。

この日本橋は、延宝元年日本橋本町

一丁目に三井高利が店を開きました。

高利の祖父が近江国佐々木家の重臣で三井越後守という武将でしたが、武士をやめ伊勢松阪で松阪木綿を扱い、越後守の名を取って越後屋。

ヨーロッパより100〜150年早い現銀掛け値なしの正札販売。急ぎの客には待っている間に仕立ててくれる。反物も一反単位でしか売らなかつたものを欲しいだけの小切れで売る。

にわか雨の時には越後屋と書かれた番傘を貸し出し。

“江戸中を越後屋にして虹をふき”なんて川柳が生れたほど、動くコマースャルです。その賑わいの絵図が三越前地下通路に展示してある^{きだいしょうらん}熙代勝覧。むつかしい字ですが光り輝く、喜ぶという意味があり200年前の日本橋の活気ある様子をご覧下さいという意味でしょうね。越後屋の両替商が三井銀行となり三井発展の基になりました。江戸っ子は宵越しの銭を持たないといわれましたが、元手がなくても商いが出来たんです。

花のお江戸日本橋の流通経済、重三郎がこの日本橋に進出。

名プロデューサーとしての腕が発揮されていきますお話しは次回に。